## オカリス神父:「主 のぶどう園で謙虚に 働いたベネディクド 16世を与えてくだ さった神に感謝を捧 げましょう」

オプス・デイ属人区長、フェルナンド・オカリス神父は、 1986年に教理省の顧問に任命され、それ以来、ラッツィンガー枢機卿と共に働きました。オカリス師が、亡くなした。オカリス師が、一を回想します。 ベネディクト16世が帰天されました。それによって、私たちは、自らを主のぶどう園の謙虚な働き人、司祭、神学者、司祭、枢機卿、教皇を失いました。教、枢機卿、教皇を失いました。教皇を失いました。数は当然のことを、神に感謝するのは当然のことをです。2013年以来、祈りの内に生きておられた慎み深さと節制は、ドイン出身であった教皇の最後の教訓でありました。

1986年、私が教理省の顧問として、 共に働き始めたときに初めて個人的 にお会いして以来、誰にでも耳を傾 ける彼の姿勢に心を打たれました。 教理省の仕事やその他の理由で、何 度も二人きりになる機会に恵まれま した。その際、彼は決して話を切り 上げたり、他の用事が待っている素 振りを見せることもありませんでした。自分の意見と異なることがあっても、他人の意見を尊重し、高年した。自分よれていました。自分は不足した。自分は不足を対意見であって、とない。であることなられました。であり、それの言理であり、それの言理であり、それの言理であり、それの言理なの司教紋章には、聖ヨハネの言理の記さいました。では、聖コハネ3,8)が刻まれていました。

教会と教皇に対する彼の愛は、感情的なものを超えて、模範的なものを超えて、模範的なも司が提案されたものを受け入れたも司が提案されたものを受け入れたもっでです。 では、ルフェーブル大司教が提案されたものを受け入れた。 が提案されたものを受け入れた。 の、その直後に撤回したとき、ラッツィンガー枢機卿は、「ローマ教皇がいなければ、無に等しいということです。 彼が、神と教会の求めることを受諾するこができたのは、彼の謙虚さとく神への愛のためだったのです。良いた役職を、より若く活力あふれるりに引き継ぐために、聖ヨハネ・パウロ2世に幾度も辞表を提出しました。教皇から慰留されたラッツイ経機卿は、迷うことなく留任を決めたのでした。

ペトロの座に選ばれた直後に、次のとを打ちいました。聖きいかに選ばれた直後に、聖きいかに見けられました。という口2世が帰天されり、に帰りに帰りにはいるというは、のののでは、ののできるとのでは、これがでいるというでは、といったとしたがでいるというできないが、したいというできなが、したいというできなが、したいというできなが、したいというできなが、したいというできなが、したいの人に帯を締められ、他の人に帯を締められ、他の人に帯を締められ、他の人に帯を締められ、他の人に帯を締められ、他の人に帯を締められ、他の人に帯を締められ、他の人に帯を締められた。

きたくないところへ連れて行かれる」。

同じように、ペトロの後継者としての使命に伴う厳しい責任を適切に、ペトロの後継適切に、ペトロを適切を適けるというできるでは、となるではないできる。皆とではいるというに、とは、とは、とは、とは、というでは、ないのでは、ないでした。とはありませんでした。

沈黙の祈りの中で教会に仕えつつ隠れるという姿勢は、教皇を退任されてからの日々において、彼の際立った姿でした。バチカン庭園の住居に、何度かお訪ねする機会がありましたが、人々のことを心にかけて専したが、あることが良く分かりまし

た。ご自身、次のように仰っていました。自分は、御父の家に向かう巡礼者であり、また、自分の愛と長年の研究の対象であるキリストとの抱擁に向かっていることを感じていると語っておられました。

ベネディクト16世は、約8年間の教 皇職の間に、回勅『神は愛』、『希 望による救い』、『真理に根ざした 愛』をはじめ、多くの使徒的勧告や 説教からなる偉大な霊性と教義の財 産を私たちに残してくださいまし た。また、水曜日の一般謁見を通し て行われた教導職は非常に豊かなも のでした。その中で、教会につい て、使徒たちについて、教父たちに ついて、さらに、神との対話に関す る非常に美しく深い考察からなる祈 りについてなど、一連の講話をなさ いました。

彼の生涯の目的は、彼がペトロの奉仕職を開始するミサにおいて、彼自

身が口にした麗しい言葉に示されていると言えるでしょう。「福音に驚きを感じること、キリストと出会うこと以上にすばらしいことはありません」。彼にとって幸せとは、「名前があり、顔があるのです。それは、ご聖体に隠れておいでになるナザレのイエスの御顔です」。

ベネディクト16世は、歴史という海で教会という舟を導き、「太陽が注ぎ、そよ風の吹く多くの日々(…)、多くの魚のとれた日々(…)、波が荒れ、逆風が吹き、わないであるかのように思わまり、イエス・キリストはもしておられました。舟はおられたのであることを知っておられたのです。

回勅『希望による救い』で見事に表現されたように、ベネディクト16世は、「わたしたちに近い光(…)、キリストの光によって輝き、わたし

たちの道を導いてくれる人々」の一 人でありました。

教会のぶどう園における彼の働きは、キリストの愛に満ちた言葉を受けるのに相応しいものでした:「善良で忠実なしもべよ、さあ、あなたの主の家に入りなさい」。

Fernando Ocáriz

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/ocariz-benedicto-16/(2025/12/10)